

# 日本学術会議 国際対応分科会 自己点検報告書

国際対応分科会(小委員会)名 IUGS(国際地質科学連合)分科会 更新日 2012/12/14  
(2009/05/01の形式)

## 国際学術団体に関する事項

国際学術団体名

(和文) 国際地質科学連合  
(欧文) International Union of Geological Sciences  
(略称) IUGS

日本学術会議加入年(西暦) 1962 年

運営組織の名称・役員の構成等

運営組織の名称(欧文) International Union of Geological Sciences

	会長	会長代理/次期会長	副会長	事務局長
(氏名)	A. C. Riccardi		J.Charvet, O.Gerel	P. T. Bobrowsky
(国)	Argentina		France, Mongolia	Canada

役員選出方法の概要(120文字程度で記載)

4年毎の万国地質学会議(IGC)に開催されるIUGS総会において、各国から推薦された候補者をもとにNominating Committeeが作成した原案を各国代表で議論し、最終的に投票によって役員が選出される。

加入国・地域の数 121 ヶ国

主要加入国(10ヶ国程度を列挙)

Japan, USA, Russia, UK, Canada, Argentina, Germany, France, Norway, China, Australia, Saudi Arabia

国際学術団体のホームページURL [www.iugs.org](http://www.iugs.org)

国際学術団体の年間運営経費 US\$400,575

日本の分担予定額[事務局で記入] 2,875千円(2012年度)

## 国際学術団体の活動状況

### 総会・学術研究集会の開催状況(過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載)

開催年 (西暦)	会議の名称	開催地	参加者数	日本からの 参加者数	学術会議共催/ 協賛の有無
2012	The 34th Internat. Geol.I Congress	Brisbane, Australia	6012	300	
2008	The 33rd Internat. Geol.I Congress	Oslo, Norway	6260	150	
2004	The 32nd Internat. Geol.I Congress	Florence, Italy	7281	367	
2000	The 31st Internat. Geol.I Congress	Riodejaneiro, Brazil	3554	126	

### 運営に関する会議の開催状況(過去10年間・開催年の新しいものから順に5件まで記載)

開催年 (西暦)	会議の名称	開催場所 (機関等)	参加国数	日本からの 代表者名	学術会議の 代表派遣数
2012	IUGS Executive Committee	Brisbane, Australia	100	松本良・北里 洋・西脇二一 ほか5名	1
2008	IUGS Executive Committee	Oslo, Norway	100	松本良・北里 洋・小川勇二 郎ほか5名	3
2008	IUGS Executive Committee	Morocco	10	松本 良	1
2007	IUGS Executive Committee	Nara, Japan		松本良・西脇 二一・北里洋 ほか	

### 出版物等(主要な定期刊行物・不定期刊行物を刊行頻度とともに箇条書きで記載)

1. Episodes (年4回発行: 学術論文、レビュー、先進技術紹介、連合活動報告など)
2. Annual Reports (年1回)
3. E-Bulletin (2002年から発行されて現在74号(2011年5月)、最新ニュースや委員会審議内容および会議予定など電子的な速報)
4. 国際標準となる地質年代表(総会時に出版、現在 August 2009年版)

活動状況(各項目につき過去5年間の状況を120文字以内で記載)

<p style="text-align: center;"><b>国際機関等の提唱で行った活動</b></p> <p>1. 国際惑星地球年：IYPE（社会のための地球科学を基調として2007年から2009年にわたって実施されているユネスコと国際地質科学連合の共同プログラム） 2. 国際地質科学研究計画：IGCP(ユネスコと米合衆国の助成によるジョイント計画) 3. 国際リソスフェア計画：ILP(ユネスコとのジョイント計画)</p>
<p style="text-align: center;"><b>国際機関等への提言等</b></p> <p>IUGSは、IGSUのGeoUnion Report(2004)にみるように、IUGGやIUGおよびIUSSとともに学際的研究を促進し、砂漠化や土壌浸食、エネルギー、気候変動、地下水、自然災害、環境と健康などの問題への情報提供に取り組んでいる。</p>
<p style="text-align: center;"><b>国際事業等への参加・実施等</b></p> <p>ユネスコとのジョイントプログラムであるIGCPやILPを推進するとともに、最近では国際惑星地球年(IYPE)の活動に積極的に協力してきた。また、EpisodesやE-Bulletineを発行を継続しており、EosやEarth Science Reviewによる出版広報活動に協力している。IYPE国際惑星地球年に関連して、ユネスコの支援事業でもあるGeoparkの活動に協力している。</p>
<p style="text-align: center;"><b>全世界的/地域的研究課題への取組み</b></p> <p>東アジアの地質発達史、とくに沈み込み帯における付加テクトニクスに貢献しており、水資源問題や地質科学史の国際集会の開催にも取り組みつつある。</p>
<p style="text-align: center;"><b>発展途上国への対応</b></p> <p>役員選出に配慮しており、国際地質科学研究計画(IGCP)を通して、広義の地質科学に関する研究および先端技術の普及と協力活動を行っている。</p>

関連学術分野の動向と今後の重要課題(120文字以内で記載)

<p>社会的問題となっている天然資源・エネルギー・水資源の確保、自然災害の軽減、自然環境の保全、地質汚染、放射性廃棄物の処理、自然文化遺産の保護などにくわえて、初期生命や地球の環境変動史の解明に、連合として今後さらに貢献すると期待される。</p>
---

## 国内における国際学術団体への対応状況

国際学術団体の役員就任状況(過去10年間・新しいものから遡って5件まで記載)

国際学術団体における 役職名	氏名	任期	
		開始年	終了年
Councillor, Executive Committee	小川 勇二郎	2012	2016
Nominating Committee	松本 良	2009	2012
Scientific Council of Y. E. S. Conference	松本 良	2009	2012
Councillor, Executive Committee	松本 良	2005	2008
Vice President, Executive Committee	佐藤 正	2000	2004
Councillor, Executive Committee	上田誠也	1989	1997

学術会議の国際対応分科会(小委員会)名 IUGS(国際地質科学連合)分科会

学術会議以外の国内対応組織・委員会等

日本地球惑星科学連合、日本地質学会、日本応用地質学会、日本鉱物科学会、東京地学協会、日本古生物学会

国内の関連学協会等の状況(主要なもの5件まで記載)

学協会の名称	会員数	学協会のホームページURL
日本地球惑星科学連合	52学協会	<a href="http://www.jpogu.org/">http://www.jpogu.org/</a>
日本地質学会	4500	<a href="http://www.geosociety.jp/">http://www.geosociety.jp/</a>
日本応用地質学会	2000	<a href="http://wwwsoc.nii.ac.jp/jseg/">http://wwwsoc.nii.ac.jp/jseg/</a>
日本鉱物科学会	1025	<a href="http://wwwsoc.nii.ac.jp/jams3/index.html">http://wwwsoc.nii.ac.jp/jams3/index.html</a>
東京地学協会	800	<a href="http://wwwsoc.nii.ac.jp/tokyogeo/">http://wwwsoc.nii.ac.jp/tokyogeo/</a>

## 学術会議の国際対応分科会(小委員会)の活動状況

学術会議の国際対応分科会(小委員会)名	IUGS(国際地質科学連合)分科会
所属分野別委員会	地球惑星科学委員会

### 分科会(小委員会)の構成

委員長	副委員長	幹事
北里 洋	松本 良	渡辺真人

会員数	連携会員数	特任連携会員数
1	13	2

### 分科会(小委員会)の活動方針(箇条書きで120文字以内で記載)

1. 地質科学分野の国際的な連携交流の促進。
2. 地球生命史、金属・非金属・エネルギー・水資源、地球環境変動史などの研究推進。
3. 地質年代の国際標準化およびその根拠となる国際層序模式地の認定。
4. 国際共同研究や啓蒙活動を通して地質科学発展への貢献。

### 今期の会議開催状況(開催日時の新しいものから遡って6回まで記載)

会議開催日時 (2009/05/01の形式)	主な審議事項・議題等
2012.10.26	2012年8月に開催された、34回万国地質学会議(IGC)の折に持たれたIUGS総会における話題を紹介した。自然災害国際ネットワークに関する議論を行い、学術フォーラムとして開催することを決めた。主委員会として、ICS小委員会を立ち上げることを決定した。
2012.06.12	7つの小委員会の活動状況を把握し、IUGSのコミッションなどとの整合性を検討した。また、2012年8月に開催される、34回万国地質学会議(IGC)の折に持たれるIUGS総会における話題と、役員選挙に関する情勢を分析した。日本人を理事として推薦しているからである。
2012/1/6	日本学術会議第22期の始まりに際し、委員を確認するとともに、連携会員の推薦を行うべく準備を進めた。また、第21期に8つあった小委員会について、その活動状況を点検し、存続させるかどうかを議論した。8つとも継続させることが望ましいという結論になったが、INHIGEO小委員会が、22期の活動を停止することになった。

日本における国際学術団体の活動の周知・広報の状況(箇条書きで120文字以内で記述)

1. 日本地質学会や日本地球惑星科学連合などのニュース誌に会議報告を提供し、ウェブサイトでも公表。
2. 対外的にはIUGS本部に毎年Annual Reportとして活動を報告。
3. IGCPについては、ウェブサイトで内外の活動状況を広報。

国際対応における国内学協会との連携状況(箇条書きで120文字以内で記述)

1. 日本地質学会や東京地学協会など、関連学協会と連携しつつ、日本地球惑星科学連合との連絡を強化。
2. 関連学協会における国際集会への代表参加や国内開催などに協力。
3. 国際共同研究への参加促進や新プロジェクトの提案に協力。

特記事項・国際委員会による指摘事項等への対応状況(箇条書きで120文字以内で記述)

従来は経済的支援の大きな国が役員を担ってきたが、最近では発展途上国から役員を選出する傾向があり、それらの国のプロジェクトへの支援がこれからの検討課題である。

分科会・小委員会活動の自己評価等(箇条書きで120文字以内で記述)

1. プレート収束境界のテクトニクス、マグマ活動、活構造など、研究上の発信は多いが、組織的対応不十分。
2. 小委員会活動は活発に展開されている。IGCPには継続的に貢献しているが、若手研究者のより積極的な参加を推進する必要がある。
3. 世界共通の地質年代表策定には、ICS委員会への代表を派遣するなど、積極的な対応が必要である。